

## 慧洪『石門文字禪』の文学世界

大野修作

北宋末の詩僧・禅僧として知られる慧洪は多くの著作を残しているが、僧史の資料として利用され、引用されることは多いが、慧洪の著作全体を対象として論じられることは少なく、特に文学者として慧洪を論じたものは皆無といってよい。本論は『石門文字禪』を中心に、文学者としての慧洪に焦点をあてようとするものである。

本論に先立ってまず彼の経歴をまとめておくと、彼の生涯を知る根本資料に「寂音自序」(『石門文字禪』卷二四、以下『文字禪』と略称することがある。また卷数のみを示す場合は『文字禪』をさす)があり、他に『僧宝正統伝』卷二、『五灯会元』卷一七、『嘉泰普燈錄』卷七の各伝記、及び『佛祖統紀』卷四六、『佛祖歴代通載』卷一九、『統伝灯録』卷二二、『釈氏稽古略』卷四、『羅湖野録』卷上、『雲臥紀談』卷上、『玉照新志』卷二等の記事が挙げられる。これらによれば、

慧洪、字は覚範、神宗の熙寧四年(一〇七二)、江西の筠州新昌県の喻氏の子として生れた。十四歳の時、両親が月を追って亡くなり、三峰山の静禅師の下で童子となった。十九歳に首都、開封の天王寺で得度試験を受けて慧洪の

名を正式に名のる。その後、成唯識論に通じた宣秘大師の下で修業し、四年間仕えた後に辞去し、南の廬山帰宗寺に住持した真淨克文に帰依し、真淨が洪州の石門山に遷る際も同行して前後七年間、仕えた。二九歳以後は「歴る所の叢林、幾んど天下に半ばす<sup>4)</sup>」と言うように、各地を遊歴したが、その間に合計四度にわたる入獄と配流を経験する。その中でも偽度牒<sup>5)</sup>と妖人・張懷素の党と誣告された経緯は記憶されてよい。五一歳の時、潭州の南台寺に帰り、五十八歳で亡くなるまでは世俗とのかかわりから距離をおいて過している。以上が彼の生涯のあらましである。

## 二

次に慧洪の著作について見てみると、詩文、仏教史から隨筆まで多岐にわたっており、『統伝灯録』に著録されるだけでも次の書が知られる。

林間録二卷、僧宝伝三十卷、高僧伝十二卷、智証伝十卷、志林十卷、冷斎夜話十卷、天厨禁脔一卷、石門文字禪三十卷、語録偈頌一編、法華合論七卷、楞嚴尊頂義十卷、円覚皆証義二卷、金剛法源論一卷、起信論解義二卷。

これらのうち、現在に伝わって手近に見られるものとしては、仏教関係では『統藏經』所収の『林間録』二卷<sup>7)</sup>、『禅林僧宝伝』三十卷、『臨濟宗旨』一卷、『智証伝』一卷であり、詩文関係では『石門文字禪』三十卷、『冷斎夜話』十卷、『天厨禁脔』三卷である。これらのうち主要な著作は、詩文では『石門文字禪』であり、禅学関係では『禅林僧宝伝』であることは論をまたない。『冷斎夜話』、『天厨禁脔』は雑記、詩評書として『石門文字禪』を補完する立場にあり、それは『禅林僧宝伝』に対して補完的な立場にある『林間録』と、ほぼバラレルな関係にある。

さて『石門文字禪』であるが、この書の成立ともかかわってくるが、もともとは「筠溪集」などと呼ばれたようである。宋末の図書目録である『郡齋読書志』では、慧洪の著作として、次の三点を著録する。

冷斎夜話六卷 (同書卷一三)

林間録四卷 (〃卷一六)

洪覺範筠溪集十卷 (〃一九)

『直齋書錄解題』、『宋史』芸文志では次のようになる。

冷齋夜話十卷 (直齋書錄解題卷一一)

石門文字禪三十卷 (同卷一七)

天厨禁衛三卷 (同卷二二)

冷齋夜話十三卷 (宋志芸文志・小説類)

物外集二卷 (同・別集類)

石門文字禪三十卷 (同・別集類)

天厨禁衛三卷 (同・文史類)

また『瀛奎律髓』卷一六・京師上元詩には方回の言として、慧洪には「甘露滅詩集」があったという。

これらから言えることは、恐らく、慧洪の詩文集の最も原形に近いのが「筠溪集」或いは「甘露滅詩集」であり、これに題跋、行状や禪学関係の文を加えて集大成されたものが『石門文字禪』<sup>(8)</sup>であろう。なお『石門文字禪』を編纂したのは、門人の覚慈であるが、彼以外に慧洪の詩文の編集にかかわった人として、海南道人惠英、仏鑑、弼上人、言上人、琦上人、珠上人の六人が知られ、生前から死後まもなくにかけては、様々なテキストが存したと思われる。

三

現在最も手近に見られる明代の刊本の『石門文字禪』(四部叢刊本)では、その内訳は巻一〜八が古詩、巻九が排

律、五言律詩、卷十〜十三が七言律詩、卷十四が五言絶句、六言絶句、卷十五〜十六が七言絶句、卷十七が偈、卷十八〜十九が賛、卷二十が銘、詞、賦、卷二十一〜二十四が記、序、記語、卷二十五〜二十六が題、卷二十七が跋、卷二十八が疏、卷二十九が書、塔銘、卷三十が行状、伝、祭文である。

前章で成立を問題にし、ここでその内訳にふれるのは、『石門文字禪』は、「文字禪」という言葉の内容と深いかかわりがあると思われるからである。『石門文字禪』には、明の達観という禅僧の序があり、それによれば、

蓋禪如春也、文字則花也、春在於花、全花是春、花在於春、全春是花、而曰禪与、文字有二平哉。

という。即ち禪は春のようなものであり、文字は春に咲く花である。春と花、その關係を禪と文字にあてはめている。しかも「禪と文字と二有りといわんや」といい、禪と文字は、春と花のように一つのものだと書いている。しかもまた序には「寂音尊者（慧洪）は…其の著す所に名づけて文字禪と曰う」とある。この序は明の万暦年間に書かれていて、いわば詩禪一味論が定着したあとに書かれているが、しかし実体はどうであったのだろうか。

詩禪一味論が自覚的に立論されるのは、南宋末の『滄浪詩話』であり、入矢義高氏によれば、<sup>10</sup> 禪と文学に対するオプチミズムは、その後、日本にくるとますます増幅され、例えば万里集九の「答仲華丈六篇詩序」という文中では、「詩熟則文必熟、文熟則禪必熟」とあり、詩が熟達してくる散文のほうも熟達することは間違いない、散文が熟達すれば、禪が熟達することも間違いない、とまで言うようになるという。

慧洪自身はたして詩禪一味論の上に立脚して、楽天的に「文字禪」の世界にひたって詩文を作っていたのであろうか。ちなみに「文字禪」という言葉を調べてみるに、管見では、『石門文字禪』中に出てくるのは五ヶ所<sup>11</sup>である。それらのうち三例は「懶庵銘」中にいう「未忘情之語、為文字禪」と同様の例で、詩文を作る意に用いている。もう二

例は「題仏鑑書文字禪」の題(タイトル)にいうように、詩文集や書名の意で用いている。後者の一例は門人の覺慈がつけたものと思われるが、総じて「文字禪」という言葉の使用頻度並びに用例から考えて、詩禪一味論的考え方の萌芽はあるにしても、慧洪自身が積極的にまた楽天的に「文字禪」の語を用いていると思えないのである。

文字禪の「文字」に相当する言葉として、慧洪がよく使うのは「多語」「語言」「語言文字」等である。例えば

○予所作語言、徧叢林(題所録詩・卷二六)

○未能忘情、時時戲為語言(題自詩・卷二六)

○於是堤岸輒決、又復滾滾多言(明白庵銘・卷一〇)

○俾明悟者、知大法、非拘於語言、而借言以顯發者也(顯雲居弘覺禪師語録・卷二五)

これらは枚挙にいとまがないほどしばしば見える。同じ語言、多語に対しても、晩年、仏教に傾斜した白樂天が、

樂天有願、願以今生世俗文筆之因、翻為來世讚仏乘、転法輪之縁也<sup>(12)</sup>

と、「世俗文筆の因」即ち狂言綺語という悪因を來世の讚仏転法輪のえにしにしたいという切実な思いを述べているが、それほど強いものではないにしても、やはり慧洪には自戒ないし羞恥の念が常に同居しているように見える。次の二首の詩のように

○詩狂欲發言、因此難韻阻、君看短後見、掉臂搏怒虎

○思決不自勝、援筆真欲迷、那堪屋漏雨、供此不<sub>レ</sub>尺谿<sup>(13)</sup>

と、作詩の過程そのものを詩にする態度からおのずとそれがうかがえる。この間の事情をよく示す詩として「瑜上人、靈石自り来り鳴玉軒詩を求む。会<sub>た</sub>ま予は作語を断ず、復た堤決す一首」と題する一例をあげて見てゆくと、

道人去我久 道人 我を去ること久し

書問且不數 書問 且つ數しばならず

聞余竄南荒 余の南荒に竄せられるを聞き

驚悸日枯削 日に枯削せんことを驚き悸るおそ

安知跨大海 安んぞ知らん 大海を跨ぎて

往反如入郭 往きて反ること 郭に入るが如きを

譬如人弄潮 譬えば 人の潮を弄そび

覆却甚自若 覆却すれども 甚はだ自若たるも

旁多聚觀者 旁らに觀る者 多く聚まり

縮項瞻為落 項を縮めて 胆の為めに落つるが如し

僻居少過從 僻居して 過從するもの少なく

閑庭墮鬪雀 閑庭に 鬪雀墮つ

手倦失輕紈 手に倦くも 輕紈を失し

扣門誰剝啄 門を扣くに 誰の剝啄せるならん

開関忽見之 関を開けば 忽ち之を見

但覺瘦鬢鑠 但だ瘦せて鬢鑠たるを覺ゆ

立談慰良苦 立談して 良に苦しきを慰め

兀坐叙契闊 兀座して 契闊を叙す

誰持稻田衣 誰か持せん 稻田の衣

包此剪翎鶴 此の剪翎の鶴を包めるを

遠来殊可念 遠来するは 殊に念うべし

此意重山嶽 此の意 山嶽よりも重し

悃悃見無華 悃悃 華無きを見るも

語論出稜角 語論 稜角出づ

為余三日留 余が為めに 三日留まり

頗覺解寂寞 頗ぶる寂寞の解けるを覺ゆ

忽然欲帰去 忽然として 帰り去らんと欲し

破械不容捉 破械は 捉うるを容れず

想見歴千峰 想見す 千峰を歴て

細路如遺索 細路は 遺索の如からん

相尋固有佳 相い尋ぬるは 固より自ら佳し

乞詩亦不惡 詩を乞うも 亦た惡からず

而余病多語 而れども 余は多語を病めり

方以黙為藥 方に黙するを以て藥と為さん

寄声靈石山 声を寄す 靈石山

詩當替余作 詩は当に 余に替りて作るべし

便覺鳴玉軒 便ち覺ゆ 鳴玉軒

跳波驚夜壑 波に跳りて 夜壑を驚かすを

瑜上人は、彼が与えた別の詩に「送瑜上人帰筠乞食」と題するので、慧洪と同郷の僧であろう。久しぶりに、海南島より還って閑庭に無聊をかこつ慧洪をたずねてくれて、あまりのなつかしさに作語の禁を破って詩を作ってしまうことをしつかりした構成で述べている。特に最後の八句、相いたずね、詩を乞うことをよしとしながら、「多語」を病んでおり、それを直すには黙するしかない。にもかかわらず、相手の住む靈石山に呼びかけ、鳴玉軒に老魚の波に跳り、山水の清音をひびかせて、私の詩にかわってくれという結びは、「文字」に対する愛惜と自戒、また自然に対する親しみとその感興を文字にするす快感とが交錯している。この詩からもわかるように、慧洪は決して「文字禪」の世界に安心してひたりきっているわけではなかったといえる。もちろん多語を自戒する中には、その発言、交際によって、政治的に連座した投獄と配流の経験が色濃く反映されてはいるが。

しかし慧洪は生来、速筆ではあったらしい。『茗溪漁隱叢話』前集卷五六に、韓駒の語として次の話を載せる。

往年、余宰分寧、覺範從高安來、館之雲巖寺、寺僧三百、各持一幅紙、求詩於覺範、覺範斯須立就、余見之不懌、曰、詩当少加思、豈若是容易乎、覺範笑曰、取快、吾意而已

という。韓駒をはじめ江西詩派の詩人の多くは、作詩にあたっては「詩は当に少しく思を加うべし」というように熟考するタイプが多かったが、慧洪は「早いのが取り柄」というように速筆であった。また自らも

予於文字、未嘗有意、遇事而作、多適然耳（題珠上人所蓄詩卷・卷二二）

というように、率意でもあった。<sup>(14)</sup>しかし率意が時にはゆきすぎて、僧にはあるまじき行為となることもあった。『茗溪漁隱叢話』前集卷五六に引く『冷齋夜話』<sup>(15)</sup>に

予謫海外、上元、椰子林中、漁火三四而已。中夜聞猿声悽動、作詞曰、擬祥宴罷聞歌吹、画轂走、香塵起、冠壓花枝馳万騎、馬行燈開、鳳樓簾卷、陸海鰲山對、当年曾看天顏醉、御盃奉、歛声沸、時節雖同悲樂異、海風吹夢、



嶺猿啼月、一枕思帰涙、

とあり、彼が張商英、郭天信に連座して、朱崖、即ち今の海南島に流謫されていた時、淋しさにたえきれずに作った青玉案詞で、往年、都で見た華やかな上元の夜の宮廷の光景を追懐しつつ感傷に耽つてしていると、海上からの冷たい風で夢をさまし、嶺からは月に啼く猿の声が頻りに伝ってきて、家郷が思い出されて涙にくれるばかりであるという。胡仔はこの詞を引いた後に、「情を忘れ愛を絶つのが積尊せきそんの訓しえであるのに、出家の身でありながら、かかる語を発し、更にこれを自ら誇るのは何と見識しなことか」と痛罵を加えている。また上元の夜に嶽麓寺に宿して都のことを懐つて作った七律一首の頸聯の「十分春瘦縁何事、一掬郷心未到家」の句を、王安石の女の蔡元度夫人が読んで思わず「浪子和尚（浮気者の和尚さん）」と叫んだと伝えられる。更に元の方回はこの詩を『瀛奎律髓』巻一六に引き、「僧徒にて此の語を為すは、無恥の流なり」と批判を加えている。

慧洪には「文字禪」の世界に安心してひたりきっていないまでも、緇流の徒としていましめるべき「綺語戒」をあえて冒そうという気があったことが、これらの詩詞からうかがえる。彼には当時からそうした評判があったと思われ、更には慧洪の著作には誤りが多くて信をおけないと批判されることがあるのも、この延長線にあるであろう。

例えば、晁公武は『郡齋読書志』巻一九の「洪覺範筠溪集十卷」に次のような評語を加えている。

…著書数万言、如林間録、僧宝伝、冷齋夜話之類、皆行於世、然多夸誕、人莫之信云、

この「夸誕であり、信をおけない」という批判は、僧史の叙述においてもいわれることがある。例えば『禪林僧宝伝』巻一に載せる曹山の伝記について、慧洪は曹山が辞せんとする中夜、洞山が曹山に、雲巖が洞山に付した『宝鏡三昧』『五位頭訣』『三種滲漏』を与えたが、疎山が早くそのあることを知って、繩床の下にひそんでぬすみ聞きしたとする。この慧洪の記述に対し、宇井伯寿氏は『宝鏡三昧』にしても『三種滲漏』にしても何ら密伝ではなく、『宝鏡三昧』は雲巖の作ではないし、慧洪がこのような俗説をまことしやかに述べ、禍を後世に遺していると厳しく批判

する<sup>(18)</sup>。禅宗史に素人である私は、この当否を正確に判断できる立場になく、『禅林僧宝伝』や『林間録』の他の文献との比較研究<sup>(19)</sup>は今後の課題であるが、僧史の叙述、引いて著作全体において、批判、または物議をかもされてもおかしくない要素を、慧洪の著作は幾分か持っているといえるであろう。

#### 四

では慧洪の著作は信を置きたい無用の長物にすぎないのであろうか。この問題を考えるためにまず「江西詩社宗派図」について考えてみたい。

黄庭堅が亡くなってまもなく、北宋末から南宋初にかけて呂本中によって「江西詩社宗派図」が作られた。呂本中の詩文にはこの図もそれに対する言及もないのであるが、『苕溪漁隱叢話』前集卷四八所引の同図によれば、宗派の祖の黄庭堅以下を次のように列記する。

陳師道	潘大臨	謝逸	洪芻
饒節	祖可	徐俯	洪朋
林敏修	洪炎	汪革	李錡
韓駒	李彭	晁冲之	江端本
楊符	謝蒞	夏倪	林敏功
潘大觀	何顥	王直方	善權
高荷			

この名字および序列には、刊本によって多少の異同があり、名字の異同についていえば、『雲麓漫鈔』には、何顥がなく呂本中が合せて合計二十五名。劉克莊「江西詩派小序」には、何顥を何覲に作り、さらに呂本中が合せて合計二

十六名。王応麟『小学紺珠』には、何頭がなく呂本中があって合計二十五名である。しかしいずれにしても慧洪はこの図の中には入っていない。

もとよりこの図の構成メンバーや序列の当否については従来さまざまな議論をかもしている。例えば、或るものは「もし陳師道が生きていたら、甘んじて宗派に入ることにはなかっただろう」といい、またこの図の序列を見て不満げに「吾は乃ち行間にあるか」といったという徐俯、「我自ら古人を学ぶ」といったという韓駒、「下列にあるを恥とした」という夏倪など、図の詩人たちの間にも不満紛紛たるものがあつたといわれる。<sup>(20)</sup> 故に慧洪がこの図に入っていないのも何ら不思議はないのであるが、図中に、饒節、善権、祖可の三人の僧が入っていたり、「呂舍人作江西宗派図、自是雲門、臨濟始分矣」という議論があつたり、呂本中は晩年、大慧宗杲に師事したことも考えあわせると、禪の宗派上の争いが影響した面もあるかと考えられる。この図の当否、またそれに入るか入らないかは様々な要素が混入して、すっきりとした結論は見出しがたいが、慧洪は結果としてこの図に入っていない。<sup>(21)</sup> それにもかかわらず、「江西詩派」とは何か、その基本テーゼは何かという点と、慧洪を抜きにしては考えられない問題が存するところに、慧洪の置かれた微妙で複雑な立場がうかがえる。

「江西詩派」の基本テーゼは何かという問題は「宗派図」中の人の問題ともからんで、単一なる概念を抽出することはむづかしいが、作詩法における「点鉄成金」「換骨奪胎」という考え方はその中の重要な柱になっている。<sup>(22)</sup>

黄庭堅の詩は典故を多用し、その典故と典故の間にも大きな意味の断絶があり、いわば中国詩の持つモザイク性を極限までおし進めたものとしてよく知られるが、その黄庭堅が作詩の法を自ら語った言葉として、「答洪駒父書」が知られる。それによれば、

自作語最難、老杜作詩、退之作文、無一字無来处。蓋後人讀書少、故謂韓、杜自作此語耳。古之能為文章者、真能陶冶万物、雖取古人之陳言入於翰墨、如靈丹一粒、点鉄成金也。(『豫章黄先生文集』卷一九)

とあり、この説を解説するものとして、必らず引かれるのが、『冷齋夜話』巻一に黄山谷云うとして述べる慧洪の語である。

詩意無窮、而人之才有限。以有限之才、追無窮之意、雖淵明、少陵、不得工也。然不易其意而造其語、謂之換骨、  
法、窺入其意而形容之、謂之奪胎法。

この換骨法、奪胎法の意味は「剽窃」だと批難する人もあるが、莫砺鋒氏も言うように、<sup>(26)</sup>点鉄成金は主に前人の辞について、換骨奪胎は主に前人の意についていうが、総じてどちらも古人の陳言を自らのものとして肉体化し、創造的に使うと解釈するのが妥当であろう。

いずれにしても江西詩派の宗である黄庭堅の作詩法に対する重要概念が、慧洪の語によって説明されなければならぬにもかかわらず、慧洪は江西詩社宗派図には入らなかつた。これは矛盾というべきであるが、宗派図からいえることは、慧洪は微妙な立場にあるということである。これでは問題の解決にならないので、次のような見方ができないかと考える。

## 五

慧洪が多言であり綺語を好み、詩文の執筆に際して率意であつたことは、一方で不信と批判を招き、江西詩派の立場上も微妙であつたことを見てきたが、また別の見方をすれば、解説者としてはふさわしい才能であつたのではないかと考えられる。ことに難解とされる黄庭堅の詩、「それを理解しようと思えば、禅関を扣かずして、どうして真の理解に至る門があらうか」と形容される黄庭堅の詩に対する禅者の側の良き解説者になつたと思われる。また黄庭堅の死後まもなく任淵によって黄詩の注釈が書かれたように、<sup>(28)</sup>慧洪が生きた時代はそれが必要とされる時代でもあつた。慧洪が青壮年期を送つた紹聖年間以降、北宋が滅亡するまでの二十数年間は、文学者にとっては暗黒とも呼べる時代

であった。崇寧元年（一一〇二）に詔布された旧法党人弾圧のための元祐學術の禁によって、蘇軾、黃庭堅らの文章墨蹟は尽く毀たれ、その詩文を「縉紳の徒が庠序の間に私かに相伝習する」ことがきびしく禁ぜられた。<sup>(28)</sup>その後時折この學術の禁が多少とも緩和されることはあつたが、公的な場で作詩することは許されず、政和年間には「大臣にして詩をつくる能わざるものあり」といわれるほどの文学不毛の時代を招致した。こうした状況下にあつて、江西詩派に連なる多くの詩人は、各地の小官を歴任しながら、その間も禁を犯してひそかに蘇・黃の文學を学び、ひたすら詩作の腕をみがいていたものと思われる。

その当時、蘇軾、黃庭堅の名は彼らにとつてすでに偉大であつた。慧洪は『文字禪』中に、

東坡、山谷之名、非雷非霆而天下震驚者、以忠義之効、与天地相始終耳、初不止於翰墨（卷二七・跋東坡山谷二帖）

といい、同様の表現が何度か見えることからもうかがえる。蘇軾、黃庭堅の中でも、特に黃庭堅の解説の必要性を慧洪は強く感じていたと思われる。例えば、

山谷筆、回三峽、不露一言、雲峯舌、覆大千、更無剩法（卷二七・跋山谷雲峯悅老語録序）

雲峯悅老の弁説は世界を覆いつくすほどであるが無駄がなく、山谷の文章は三峽をめぐるように入りくむが、片言にもすぎが無いという。「不露一言」という慧洪の表現には、黃庭堅を賛美しつつも、鑑賞者としてはもう少し解説して欲しいという気持がこめられるであろう。実際に彼の『冷齋夜話』に収められる詩話、雜記の中では、換骨法、奪胎法をはじめとして、黃庭堅に対する言及が蘇軾とともに最も多く、ついで王安石の順になっている。

以下、黃庭堅と慧洪の影響關係を詩論を中心に見ておきたい。まず禪との関連で「句中眼」がよく説かれる。

造語之工、至于荆公、東坡、山谷、尽古今之變、…山谷曰、此皆謂之句中眼、學者不知此妙語、韻終不勝（『冷齋夜話』卷五・句中眼）

用事琢句、妙在言其用、不言其名耳、此法唯荆公、東坡、山谷三老知之、…然句中眼者、世尤不能解（『冷齋夜話』卷四・詩言其用不言其名）

という。饒宗頤氏も「山谷は深く禪にかかわり、禪の傍ら詩に通じた。故に詩を論じては最も詩眼に重点を置き、その書も亦た然りである。…蓋し山谷の悟得した所は全身これ眼であり、句中之眼、筆中之眼において、触れた所は皆な通じ、会心妙契は同一の軌に出ないものはない」というが、山谷の句中眼説は慧洪にとつては自説と同じ重さを持つてであろう。

このほか、黄庭堅の詩論でよく言われる「理を以て主となすべきこと」、「学識を積むこと」など、いずれも慧洪の著作の中に見える。例えば黄庭堅は

好作奇語、自是文章病。但當以理為主、理安而辭順、文章自然出群拔萃（『豫章黄先生文集』卷一九・与王観復書）

というのに対し、慧洪は

歐陽文忠公以文章宗一世、讀其書、其病在理不通。以理不通、故心多不能平、以是後世之卓絶顛腕而出者、皆目笑之。東坡蓋五祖禪師之後身、以其理通、故其文渙然、如水之質、漫衍浩蕩、則其波亦自然而成文。蓋非語言文字也、皆理故也（卷二七・跋東坡仇池録）

という。歐陽修の評価には妥当性を欠く点があるにしても、「理」は「語言文字」より優位に立ち、黄庭堅と立場を等しくする。

また学識を積むべきことについても、黄庭堅が「次韻答刑敦夫」詩の中で、

岷江初濫觴 岷江は初め觴を濫ぶも

入楚乃無底 楚に入りて乃ち底無し

将升聖人堂 将に聖人の堂に升らんとせば

道固有廉陛 道は固より廉陛有り

といい、「答何静翁書」(『豫章黄先生文集』卷一九)などでも同様に述べるが、慧洪は、

夫水発岷山、其濫觴、至楚国、則万物至滿、則合之者衆也、善学者、其能外此乎、言公其勉之(卷二六・題言上人所蓄詩)

と、ここでもほとんど同一の表現をしている。之を要するに江西詩派の主要な詩論、またそれらをふまえるが反江西詩派に立つ『滄浪詩話』に見られる詩論のほとんどは、すでに慧洪の『石門文字禪』『冷齋夜話』『天厨禁臠』に羅列的ではあるが、見えているのである。<sup>32)</sup>ただ嚴羽も

近世有李公詩格、泛而不備、惠洪天厨禁臠、最為誤人、今此卷旁參二書者、蓋其是処不可易也(『滄浪詩話』詩体注)

というように、慧洪の『天厨禁臠』には参照せざるをえない点もあるが、人を誤まらせる部分も多いという。この評は作詩技法の書である『天厨禁臠』についてなされたものであるが、<sup>33)</sup>慧洪の著作全体についてもあてはまる面があるであろう。

## 六

禅は、まずどこまでも根源語そのものを発する事である。「根源語をイメージとリズムによって言葉に分節するところ」に詩があり、根本語の論理的分節としての体系が哲学である。いずれも分節に哲学ないし詩の存在がある故に、同時にそこに根源から離れる危険も蔵されている。<sup>34)</sup>慧洪の文字と禅の關係について、これまで詩禅一味説に楽天的に立脚していないまでも、「多言」「綺語」を好み、率意な執筆が不信を招くことがあったことを述べ、それは解説

者にふさわしい態度であったことを述べてきた。この態度は「文字と禪」という緊張関係から予想される、言葉にならない根源的経験を深化させて言葉に定着させるのが詩人のいとなみであるという期待、そこから大きくはずれてしまう。慧洪に対する不信と批難は、これまで見てきたようにほとんどこの点かその周囲に集中しているのである。すなわち「既成の分節をそのまま借用して、哲学を組立て、詩を作るといふ危険であり、それは真の間なくして哲学し、真の驚きなくして詩を作る<sup>(35)</sup>」という安易に流れることに対する指摘なのである。

しかし、この指摘だけでは、慧洪の著作が多くの読者を得、『石門文字禪』をはじめとする数多くの著作が亡びずに伝えられてきた事実に対しては十分な説明になりえていない。彼の著作がよく読まれたという事実は、彼の抜群の文章力が大きな要因として働いたのであろうが、その文章力を支えた発想の中にも特色があったはずである。恐らく次のことが大きな比重を持つのではないだろうか。即ち根源的経験を深化させて言葉に定着させる方向ではなく、慧洪の場合は平行移動する方向に働いたのではないか。これが故に能弁でしかも多作たりえたのであり、引いては別の次元の世界に対しても解説者となりえたのではないか。この間の経緯を最も端的に表わすものとして、以下、本論では「題画の詩」を中心に考えてみたい。これを考察することは、『石門文字禪』の文学世界を解明する上で大きな手がかりを提供してくれると思われる。というのも、「題画の詩」並びに自然を画と見立てた山水詩の、詩と画の複合化された世界の中で、慧洪は生き生きとした表情を見せているからである。

「題画の詩」は北宋中期以降、数多く作られるようになったが、それは宋人の自然観とも深くかかわっている。六朝宋の謝靈運あたりから発展してきた自然憧憬の心は、唐代に入るとますます強まり、その叙景描写は写實的に、精緻なまでに開拓され、宋に入ると、唐人と同一の自然観では到底前人を乗り越えられまいという意識が、慧洪をはじめ宋の詩人たちに重くのしかかっていたことはほとんど疑いを入れない（単なる叙景の詩で、すぐれた表現が宋詩に



は乏しいことがそれを証明する。故に宋人は画という限られた空間の中に、自らの意志で、積極的に人工的に自然を作り出そうと試みたのであり、その場を提供したのが題画の詩といえる。画と詩の関係は、北宋の郭熙以前であれば、画は「有形詩」と呼ばれて画の方に重点があり、蘇軾においては、「画中有詩」、「詩中有画」と呼ばれ、詩と画は同一基盤に立つことをさし、且つ数多く作られて一つの詩のジャンルを形成した。黄庭堅や慧洪に至ると、画が「無声詩」と呼ばれるようになり、詩の方に重点を置く文人士大夫の立場が確立したといわれる。<sup>(36)</sup>この立場をよく示す詩に、慧洪の「瀟湘八景詩」<sup>(37)</sup>が知られる。その序文には、

宋迪作八境、絶妙。人謂之無声句。演上人戲余白、道人能作有声画乎。因為之、各賦一首。

とあり、平沙落雁、遠浦帰帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、烟寺晚鐘、漁村落照の八幅の画に対し、有声画である詩をそれぞれ一首ずつ賦している。むしろ慧洪の場合、詩の方に重点があるが、瀟湘の八景は彼の詩によって当時から評判になったため、慧洪は八景詩の始祖の地位を獲得した。ことに臨済宗の僧であったことが一因であろが、中国のみならず、日本でも隆盛をもたらした。例えば、義堂周信は

其州郡勝概、以八称者夥：独瀟湘則歌咏画者極多、若僧史寂音、画工宋度支、是最顯于世者也（『空華集』大慈八景詩歌集叙）

といい、勝概を称するに「八」を以てする習慣があり、その最たるものが寂音（慧洪）と宋迪の瀟湘八景であるとす。また惟肖得巖も、

若瀟湘八景之図、按湘山野録云、出于宋復古氏、然坡集唯称復古瀟湘晚景而已、不件繫其八、可怪也、及寂音石門集、八景具焉、称之無声句、妙絶可想見矣（『東海瑠華集』平沙落雁図叙）

と、『湘山野録』を引用し、八景画は宋迪より始まるが、東坡集では瀟湘晚景だけであり、八景詩として整うのは寂音慧洪からであることを指摘する。<sup>(38)</sup>

では慧洪の題画の詩の実体がどうであるかといえ、例えば今引いた「瀟湘八景」の中の「江天暮雪」を見ると、

潑墨雲濃婦鳥滅 墨を潑ぎ雲濃くして 婦鳥滅す

魂清忽作江天雪 魂清くして 忽ち江天の雪を作す

一川秀発浩零乱 一川 秀発して 浩として零乱し

万樹無声寒妥帖 万樹 声無く 寒として妥帖す

孤舟臥聽打窓扉 孤舟 臥して聴けば 窓扉を打ち

起看宵晴月正暉 起ちて宵晴を看れば 月 正に暉く

忽驚尺卷青山去 忽ち驚く 卷尽きて 青山の去らんことを

更覚重携春色帰 更に覚ゆ 重ねて青色を携えて帰るを

この詩の五句にあるように、孤舟のこぎゆく音を臥して聴き、七八句にあるように、横巻の画を見尽すと青山が去ってしまうようであり、更にこの画を見終えると春景色まで持ち去られてしまうように感ずるといふ。この詩は画と詩と自然の関係が密接で入りこんでいるが、こうした画にひきこまれて画を味わう鑑賞の仕方は、題画の詩の成熟とともに北宋のころから盛んになってきた。当時の画家である郭熙は著書の『林泉高致』山水訓の中で、「山水画を楽しむのは徳の高い人であり、徳が高ければ、社会的国家的責任を甘んじて負い、都会での公的生涯に縛られているのが常態である。そういう人は、山水画の中へ想像の旅に出て、画家がそのことに描きこんだ自然の美と雄大さと静寂とによって心を潤し、爽快な精神で再び仕事に戻る人である」と述べるが、そうした情況を背景にして題画の詩も、王安石あたりから画に没入して味わう詩がつくられるようになり、蘇軾を経て黄庭堅になると、画を味わい、画と語りあうといった複雑でいりくんだ関係が作られるようになった。<sup>39)</sup> 慧洪ももちろんその流れを継承するが、黄庭堅で題

画の詩も行きつくところまで行きついた感があり、慧洪の場合は、黄の「晦菽」さはすでになく、きわめてなめらかなのである。しかも画に題するだけでなく、自然や建物までも一つのキャンパスに見立てて題するので、慧洪の題画の詩の数は蘇軾や黄庭堅にくらべれば相当に少ないが、見方によっては慧洪の詩はすべて題画の詩ではないかと錯覚させる面がある。例えば、詩では

千里穠纖上眉睫 千里の穠纖 眉睫に上り

一区形勝発天蔵 一区の形勝は 天蔵より発せり

有詩摹写江山美 詩有りて 江山の美を摹写せんとするも

無計遮欄歳月忙 計る無し 歳月の忙しきに遮欄せらるるを

(卷一三・次韻題必照軒)

清境浄縁慚独享 清境 浄縁 独り享くるを慚じ

幽懷佳句与誰同 幽懷 佳句 誰と与に同じくせん

平生垢習消磨尽 平生の垢習 消磨し尽し

只有文章气吐虹 只だ文章有りて 气 虹を吐く

(卷一三・立秋日偶書)

佳処毎煩詩句写 佳処 毎に詩句の写を煩わし

勝游宜作画図看 勝游 宜しく画図の看を作すべし

(卷一三・次韻李方叔水宿)

これらの数詩の例からもわかるように、「清境」「佳処」「形勝」↓「佳句」「文章」↓「画図」と、矢印で示すことが

できるように、慧洪の詩は、自然との交流、詩句への定着、別次元への出入がきわめてなめらかであることを気がつく。これは散文においても同様で次のような表現がある。

○読之、龍蛇飛動：陰晚坐、覺山川増勝、爽然忘其孤廢也（卷二七・跋珠上人山谷醜池詩）

○予曰、凡四海九州、山川煙雲、皆吾画筍也（卷二六・又惠子所蓄）

○毎開卷而奇遇、如行孤山之下、如入輞川之塢（卷二〇・王舎人宏道家中蓄花光…）

やはり詩と同様の別次元へのなめらかな出入があるといえる。

この出入は、視点の移動が主に平行移動的に行なわれているためになめらかと感ずるが、それはいわば別のジャンルへの未知の旅であり、新たな発見と新鮮さがある。故に慧洪は黄庭堅の解説者の立場にあるといっても、最も黄庭堅らしくない、なめらかさとさわやかさの特徴を彼の詩は持つのである。この点こそが慧洪の才能が最も効果的に発揮される場所であり、そうした成功を収めた詩は相当数にのぼる。しかし従来の文学批評ではほとんど評価らしい評価がされず、この特徴に対してはほとんど言及されていない。

こうした彼の視点の移動という特徴が何に基因するかといえば、恐らく、次の詩の一節から考察してみるに

数筆江村供晚望 数筆の江村 晚望に供し

一蓑煙雨助詩愁 一蓑の煙雨 詩愁を助く

（卷二二・彦周借書）

この詩句を補って解釈すれば、「数筆」で描けるような「江村」は夕ぐれのながめによろしく、「蓑」をさしたような「雨にけむる」風景は詩心を助長する、とでもなるう。ということはワイルドの「自然は芸術を模倣する」の名言にあるように、画家の眼ですくいあげられた画像を慧洪は見慣れていたと思われ、その結果、「数筆」「一蓑」といった

画面に用いるべき形容詞を、風景に対してつけることができたのであろう。画家が一つの画像を定着させる努力と格闘はすでに処置済みのこととして、慧洪自身はなめらかに別次元の世界へ参入し、出ることができたと考えられる。

こうした発想をなぜ持ちえたかといえば、恐らく当時きつての墨梅の画家・華光仲仁との交流が大きく影響しているであろう。華光の経歴は慧洪の著作なくしてはほとんど語れないほどであり、「墨梅」という画法を世に広めた慧洪の功績も大きいといわねばならない。また華光との交際によって、画家の眼ですくいあげられた画像を持ちえただけでなく、蘇軾・王安石・黄庭堅らの画論を実際に定着しえた利点も、慧洪にはあったであろう。例えば

読東坡詩、見山川之精神、如児稚对蜜知甜（卷二六・題華光鑑湖図）

といい、

華光老人、眼中闔煙雨、胸次有丘壑、故戲筆和墨、即江湖雲石之趣、便足春色（卷二六・題墨梅山水図）

また

華光作此梅：見便覺趙昌写生不足道（卷二六・題墨梅）

という。これは蘇軾のいう「胸中の成竹<sup>(41)</sup>」や、画は対象物の「常形を描くことではなく、常理を表現すべきもの<sup>(42)</sup>」であり、従って常形を描きえただけの趙昌<sup>(43)</sup>を評価しない等、蘇軾の絵画観をふまえている。また

道人三昧力 道人の三昧力

幻出随意現 随意の現を幻出す

（卷一・仁老以墨梅遠景見寄…）

この詩は、王安石の「頗ぶる疑う道人の三昧力、異域の山川を能く断取<sup>(44)</sup>す」をふまえるであろう。また黄庭堅からは画にひたたりきる態度を得ている。しかしそれら先人をふまえながらも、慧洪の特徴はなめらかに異次元へ出入するところに存するのである。

こうした発想を持ちえたもう一つの理由に、当時の禅林の立地環境はかなり良好で、本来が世俗の埃のない世界である上に、風光の明媚さが加わって、山水画の世界にきわめて接近した存在であったことが考えられよう。「遠游堂記」(『文字禪』卷二二)に見える、友人の夏均父が住んだ靈泉寺は、

館于靈泉寺、寺臨大江、江流湍急、断岸千尺、万峯環之、如趨如揖、如翔如集、公構堂其西、尽収其形勝、靖深以宜茂林修竹、虚明以隔羣声塵氛、而名之遠遊

というし、また「吉州禾山寺記」(『文字禪』卷二二)でも、その立つ所の永新は「江西山川形勝之地、城南有山、巋然深秀、晴嵐夕暉、応接不暇者」ほどであったという。

慧洪のこうした絵画観、自然観を最もよく知りうるものに「画浪軒記」(『文字禪』卷二二)がある。建中靖国元年(一一〇一)に洞山の禅悦堂に滞在した時に書かれたもので、前半にはその建物について言及し、

於枕間、憐南開軒、以納衆山之勝、眼倦抛書坐臥、惟山之接山、容無尽而楽亦無厭也

とあり、窓がキャンパスになるよう工夫され、風景と画がほぼ完全に一致したものとして見なされている。中後半は、彼のために孫知微の画法を知る人が壁面に画を描いてくれ、それに対し、慧洪は、

異哉、一堵之間、須臾之頃、而江湖万頃之勢、壮波怒渦、窪隆千状、而有不窮之變、陰風徐来、毛骨震掉、忽焉如舟洞庭、而望霜曉也……

といい、郭熙『林泉高致』や蘇軾「書蒲永昇画後」の表現を多くふまえながら、一堵の間に無限の世界にあそびまわれる新しい空間を、新しい素材として文学に構築しえている。

慧洪は生涯を禅僧として生きたが、仏教は本来、出家の宗教であり、禅はその最たるものであった。しかし、「宋朝の禅者は、その思想の自由とは裏はらに、完全に国家体制の枠内にあった。国家の危急に際しては、政治的発言も

避けられなかった<sup>(45)</sup>。慧洪をはじめ有力な禪者たちは、再三ならず流謫の経験を持っている。こうなると禪の自由は、詩歌、芸術の世界に遊ぶほかはなくなる。慧洪の場合、四度にわたる入獄と流謫は、ますます詩歌への傾斜を強めたにちがいない。しかし、文字の遊戯や無意味な饒舌、没思想の美学に終る可能性が高まる中で、彼はそのまま流されていたのではない。慧洪はその活路を、題画の詩のような複合的な領域の中で、異次元への飛翔に見出したといえるのではなからうか。『石門文字禪』の文学世界は、当時の禪の状況を最も端的に照らす鏡の世界ともいえるであろう。

## 注

- (1) 慧洪の伝記については、阿部肇一「北宋の学僧徳洪寛範について」(『駒沢史学』第二四号、昭和五二年三月)、西脇常記「慧洪研究序説―寂音自序をめぐって―」(堀川哲夫編『一〇世紀以降二〇世紀初頭に至る中国社会の権力構造に関する総合的研究』所収、昭和六〇年三月)、西脇常記「慧洪研究(一)」(京大教養部「人文」第三三集、昭和六二年三月)がある。
- (2) 前注の西脇氏の両論者のうち、前者は「寂音自序」の資料的価値・並びに思想的立場を論じており、後者は実質的に「慧洪年譜」である。筆者は本稿脱稿際にこの年譜の存在を知り、準備してあった年譜を割愛した。詳しくは西脇氏の年譜を参照。
- (3) 自叙では新昌喩氏の子とするが、『五燈会元』等其他の多くの伝記は高安彭氏の子に作る。『文字禪』では親戚は彭の姓を名のるので、俗姓は彭氏と思われるが、何故、自序で喩氏の子と名のるのか、不明。『文字禪』の注者の釈貫徹も「幼年にして喩氏の養子となるか」と疑問を呈している。なお慧洪は三十二歳で還俗させられ、張商英の上奏で「徳洪」と名をかえるが、本論では「慧洪」を一貫して使用する。
- (4) 『文字禪』卷二三・五宗綱要旨訣序。
- (5) 狂僧の誣告によるというが、空名度牒の売買に関するものであったらしい。度牒政策については、塚本善隆「道君皇帝と空名度牒政策」(著作集卷五所収)、竺沙雅章「宋代売牒考」(『中国仏教社会史研究』所収)にくわしいが、慧洪の場合、実体がどうであったのかは不明。
- (6) 張懷素とは一種の術士で、『揮麈後録』卷八によれば、もと舒州の僧であったが、民を惑わすということで畢仲游によって還俗させられたが、大観年間ごろ、風水また淫巧の術によって士大夫の家に出入したという。宋代の術士について、竺沙雅章「宋代の術士と士大夫」(『東方学会四十

周年記念東方学論集』所収)に紹介があるが、張懷素についてには言及されていない。詳細は不明。

(7) 『統藏経』では『林間録』二巻並びに『林間録後集』一卷を取めるが、後者は『石門文字禪』巻十七・二四の抜書である。

(8) 『文字禪』巻一五・与法護禪者に「手抄禅林僧宝伝、暗誦石門文字禪」とあるので、「禅林僧宝伝」と同じころには「石門文字禪」も書物の体裁をとったとは思われるが、彼の生前では、現在見られるほどの各文体が完備したものでなく、原形に近いものであったろう。

(9) 以上六人は『文字禪』巻二六の「題所録詩」「題佛鑑蓄文字禪」「題弼上人所蓄詩」「題言上人蓄詩」「題自詩」「題珠上人所蓄卷」に見える。

(10) 「中国文字から見た五山文学」(『五山の学芸』大東急記念文庫刊・昭和六〇年三月 一六四—一六七頁)。

(11) 「僧従事文字禪三首」(巻一五)、「手抄禅林僧宝伝、暗誦石門文字禪」(巻一五・与法護禪者)、「愛将夷甫雌黄口、解説定林文字禪」(巻一五、余将経行…)、「未忘情之語、為文字禪」(巻二〇・懶庵銘)、「題佛鑑蓄文字禪」(巻二六)。

(12) 『白氏長慶集』巻七一、六讀偈。なお白楽天が仏教に傾斜してゆく経緯を述べた論考に平野顯照「居士を表明する白居易の心情」(『神田喜一郎博士追悼中国学論集』所収)があるが、文字と禪については論及されていない。こ

の白居易の例は前掲入矢氏論文に指摘されている。

(13) 以上二例は『文字禪』巻十四・履道書斎植竹甚茂用韻寄之十首の第九首と同巻・履道見和復答之十首の第十首である。

(14) 慧洪と交際のあった許顛も『智証伝』後序で、「口は言う所を横(ほしいまま)にし、心は念う所を横にし、風のごとく馳せ雲のごとく騰り、泉のごとく涌き河のごとく決し、其の快を喻うるに足らざるなり」という。その上、言葉の練磨をあまりしていない「奇意于一戯、故語不復料理其当否」(巻二六・題自詩寄幻住庵)と自らいう。

(15) 現在通行の『冷斎夜話』にはこの話は見えない。

(16) 『茗溪漁隱叢話』前集巻五六・「忘情絶愛、此瞿曇氏所訓、慧洪身為衲子…又自載之詩話、矜衒其言、何無識之甚邪」

(17) 『能改齋漫録』巻一一、「洪覺範有上元宿嶽麓寺詩、蔡元度夫人王氏、荆公女也。誦至十分春瘦綠何事、一掬鄉心未到家、曰、浪子和尚耳」

(18) 宇井伯寿『第三禅宗史研究』二二三—三二〇頁。また鈴木哲雄『唐五代の禅宗』第四節撫州府でも紹介される。

(19) 例えば牧田諦亮「贊寧とその時代」(『中国仏教史研究』第二所収)に、『宋高僧伝』に対する批判として、『林間録』から三ヶ所、『冷斎夜話』から一ヶ所を引いている。阿部肇一「北宋の贊寧と徳洪の僧史観」(『中国禅宗史の研究』所収)に、『禅林僧宝伝』と『宋高僧伝』を対比する



指摘があるが、指摘にとどまって本格的な論及はなされて  
いない。なお『禅林僧宝伝』は、京大人文科学研究所の柳  
田聖山教授の班で昭和六〇年度に会読を終えているといわ  
れるが、筆者は残念ながら参加する機会を持たなかった。

(20) 以上三例は『清波雜誌』巻八に見える。

(21) 『竹波詩話』巻三。

(22) 『叢林盛事』巻上、「近世：呂居仁学土、皆見妙喜老人  
登堂入室、謂之方外道友」とある。また荒木見悟「大慧  
書」〔筑摩書房『禅の語録』一七〕参照。

(23) 「江西詩宗派図」についての日本での論考には合山  
会報「呂本中の『江西詩宗派図』について」(九州中国学  
会報)第一六巻)がある。最近、中国、台湾での江西詩派  
に関する論考は、莫砺鋒『江西詩派研究』(一九八六・齊  
魯書社刊)、龔鵬程『江西詩社宗派研究』(文史哲集成

九〇)、黄啓方「論江西詩派」(『兩宋文史論叢』・学海出版  
刊)が相ついで出版された。龔氏の論は詳細で集大成とも  
いうべき大著で、龔氏によれば、江西詩社宗派図の図表の  
形成にあたっては、宗族結構、社会組織(結社)、正統観  
念(道統、文統、法統)が背景にあり、また身近な例とし  
ては「淳化閣帖」を始祖とする法帖譜系なども影響したと  
であろうと指摘する。このほか道統・結社・修譜の論考とし  
て、劉子健「宋末所謂道統の成立」(『兩宋史研究叢編』所  
収)、鈴木中正「宋代仏教結社の研究」(『史学雑誌』五二  
一・二・三)、森田憲司「宋元時代における修譜」(『東

洋史研究』三七巻四号)等がある。なお『宋元学案』には  
もちろん慧洪は入らないが、黄庭堅は蘇軾の学案ではなく、  
呂本中の先祖である呂希哲と同じ「茫呂学案」に入ること  
も注目に値する。しかしこの問題は別の機会に論じたい。

なお資料として傳璇琮編『黄庭堅和江西詩派卷』(『古典  
文学研究資料彙編』一九七八)が出て、江西派に関する資  
料の検索は格段に便利になった。

(24) 慧洪は宗派図には入っていないが、莫砺鋒『江西詩派  
研究』ではかなりの比重を以て江西詩派中の人と位置づけ、  
また陳永正選注『江西派詩選注』(中山大学出版社刊、一  
九八五)では十首も選注されていて、現在では実質上、江  
西派の詩人として扱われている。

(25) 莫砺鋒『江西詩派研究』二八三—三〇五頁で黄庭堅  
“奪胎換骨”弁が扱われている。

(26) 同右。

(27) 張秉権『黄山谷的交游及作品』(香港中文大学出版社  
刊、一九七八)の饒宗頤氏序文。

(28) 拙稿「黄庭堅集のテキスト」(『鹿兒島大学文科報告』  
第十九号)参照。

(29) 『宋史』巻一九崇寧二年四月乙亥の条。また外山軍治  
「靖康の変における新旧両法党の勢力関係」(『金朝史研究』  
所収)。

(30) 『齊東野語』巻一六に「詩道否泰、亦各有時。政和中、  
大臣有不能詩者、因建言詩為元祐學術、不可行」と見え、

- 『石林燕語』や『容齋三筆』などにも同様の記事が見える。
- (31) (24) に引用する饒宗頤氏序文。
- (32) 荒井健「滄浪詩話と潜溪詩眼—宋代詩学おぼえがき—」(『東方学報』京都第四四冊)の中で、両者の共通点として、(1)詩禅説、(2)反俗説、(3)兼巧説をあげる。対立点としては『詩眼』の方は分析主義的で「健」の美学が背景にあるのに対し、『滄浪』は妙悟を重視し、作品を全体としてとらえる「渾」の美学が背景にあることを指摘する。
- 「潜溪詩眼」と「滄浪詩話」を対比的にとらえることで、宋代の詩話、詩論、例えば羅根澤氏(『中国文学批評史』中)のいう韓駒の「禅悟説」、呂本中の「活法と悟入」、楊万里の「風味説」等は、ほぼ包摂されると考えられる。
- (33) 例えは『天厨禁脔』一書中には巻上の近体三種頌聯法、四種琢句法に始まって、巻下の分布用事法、窠因用事法に至るまで、句法を中心に様々な作詩技法が解説されるが、親切というより、精神の安任に流れる姿勢が感じられる。
- 『四庫提要』も「古詩押韻法換韻の類は、尤も茫然として古法を知らざる也」と批判している。
- (34) 上田閑照「禅仏教」(筑摩書房刊、一九七三)六六・七頁。
- (35) 同右書七四頁。
- (36) 青木正児「題画文学の発展」(全集卷二所収)、戴麗珠「蘇東坡与詩画合一之研究」(台湾師範大学碩士論文、一九七五)、拙稿「黄庭堅詩における“もの”による思考—格

物と題画詩」(『鹿児島大学文科報告』第十八号)。

中国における詩と画を論じたものに、錢鍾書「中国詩与中国画」(『開明書店二十周年紀念文集』所収、一九四八)があり、蘇軾から董其昌までの題画の詩を論じた書に Susan Bush「The Chinese Literati on Painting: Su Shih to Tung chi-chang」(Harvard Yenching Institute Studies XXVII, 1971)があり、蘇軾と黄庭堅の題画詩を論じたもの。

Ronald C. Egan「Poems on Paintings: Su Shih and Huang Tingchien」(Harvard Journal of Asiatic Studies Vol. 43, No. 2, 1983)がある。蘇軾の題画詩を論じたものは、周義敢「蘇軾の題画詩」(『東坡詩論叢』所収、一九八三、四川人民出版社)をはじめ中国での論文も多くあったが、慧洪を専門に論じたものは未見。

(37) 八景図を中心に論じたものに、神田喜一郎「中国山水画と瀟湘八景図」(『古美術』二号、昭和三八年)、島田修二郎「宋迪と瀟湘八景図」(『南画鑑賞』一〇—、一九四一)があるが、ともに慧洪の立場は明確にされていない。

(38) 現在通行の『湘山野録』にこの記事は見えず、前記島田論文もこれを問題にしている。

なお日本での瀟湘八景詩の流行については、朝倉尚「禅林の文学」(清文堂刊、一九八五)三一五八頁にくわしいが、そこに引用する慧洪の詩は、『文字禪』卷十五の七絶の八景詩で、無声句との関連でとりあげられる同書卷八の

七律の詩でないのは、恐らく誤解であろう。

(39) 拙稿「黃庭堅詩における“もの”による思考—格物と題画詩—」(『鹿兒島大学文科報告』第十八号)

(40) 翁同文「花光仲仁の生平与墨梅初期的發展」(『故宮季刊』第二卷第一期、同二卷第三期)は、主に鄒浩、黃庭堅、慧洪の側からの資料を使って論ずるが、ほとんどを『石門文字禪』に依っている。

(41) 蘇軾「文与可画筧谷偃竹記」

(42) 蘇軾「淨因院画記」。以上の二つの文章は小川環樹・山本和義『蘇東坡集』(朝日・中国文明選2)に訳注がある。

(43) 蘇軾「書鄂陵王主簿所画折枝二首」詩其一に「辺鸞雀写生、趙昌花伝神」とあるが、蘇はこの二人の画家には高い評価を与えていない。

(44) 王安石「純甫出釈慧崇画、要予作詩」。

(45) 柳田聖山『禅語録』(中央公論、「世界の名著」18)五五頁。